



宮 沢 賢 治 幻 影

光 と 風 と



飯岡山(359m)(盛岡市都南)

画・文/滝田恒男

宮沢賢治の世界を描き続ける画家。自宅に「画廊たぎた」を開設。著書に詩画集「宮沢賢治ゆかりの地」「風の巡礼—経理ムベキ山」など。(花巻市里川口在住)

今年的大型連休は雨と寒が続きで最終日六日だけは何んとか晴れた。早速スケッチに出掛ける。掲載のスケッチは盛岡市都南に位置する盛岡工業高等学校校垣から描いた「飯岡山」(手前)と遠景は雪を蓄えた「岩手山」である。

賢治さんは、多感な少年時代、盛岡中学校、盛岡高等農林学校と盛岡で過ごし、何度となく花巻と行き来し車窓から目にしたであろう飯岡山を作品にも登場させている。

描き終えた後、飯岡山へ登る登山口は両側に大きな石が置かれ(何十年前かに登った時を想い出す)、山道は荒れているが道は分かる。自然でいい感じ。鶯が鳴いている。口笛で真似すると近寄ってくる。縄張りの習性だ。飯岡山は雑木林で「クロモジ」や「キブシ」の木が多く自生し両方とも淡黄色の花を咲かせ歓迎してくれた。

頂上は眺めはい、とはいえないが、まだ葉の開かない梢から周囲が透けて見える。西側には箱ヶ森や赤林山等、たくさん賢治さんの「ゆかりの山」がそびえ、裾はリング畑の多い都南地域、葉の散布で機械の音が忙しく聞こえる里山の風景(音)だ。

短歌【七四三】



編集後記

From Editor's



最近、プライベートでカメラのシャッターボタンを押す時、モノクロモードに切り替える機会が増えた。「色」の縛りから解放された、「光」の明暗だけで表現する難しさから逆で新鮮で楽しく感じられるからだ。きっかけは、自分が幼い頃に、両親が撮ったであろう白黒写真の存在。カラー写真とは違い、モノクロがその場の空気や写した人の感情まで感じられるのは余計な色彩にとらわれず被写体に集中できるからなのだろう。色の美しい写真は勿論なのだが「純粹に伝わる写真を撮れ」と古びた写真が教えてくれた気がした。【又川】

「ブジカエルを覚えていますか？」受話器の向こうの蛙の形をしたお守り。大学4年の夏、四国八十八箇所巡礼をした際、お遍路さんから頂き、私も出会った旅人へ託した。蛙は色々な人の想いを乗せながら旅を続け、電話の主の元へ辿り着いたようだ。電話の音は、私が蛙と共に添えた手紙と一緒に回って来た事も教えてくれた。文中に「今日の感謝を明日出会う人へ繋げる仕事に就く」と書いてあった事も。過去の自分からのメッセージに尻を叩かれた。あの頃の熱い自分に今の私も負けていられない。【大内】